

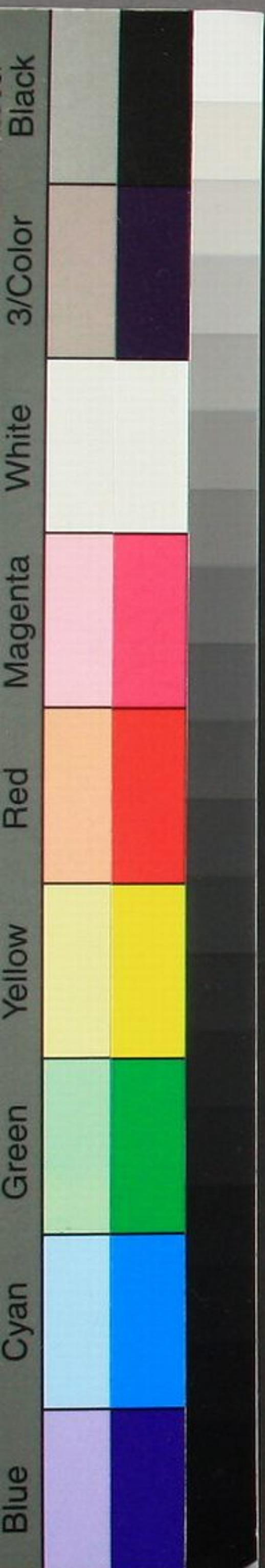
8 9 10 11 12 13 14 15 16 17

70

60 59 58 57 56 55 54 53 52 51

80 79 78 77 76 75 74 73 72 71

6 5 4 3 2 1 2 3 4 5 6 7





古今和歌集卷第五

ねす下

あらまひみのるの平舎の

文屋のやまと

吹くふれのままで やぶれをとくと風とあへとつて
かくまゆ秋の草のあわれどをし風と嵐とよ
うとよわてなばとうれり。山風と嵐とよまよ
はくらうきあへと。山野へあへまきむれを。嵐
を荒すよまくらう。むべき宣流とよをよりともる
程をりとよせ。山にはほのとみよ下よよへて
まつゆ一ぬあれそりともう

おとよおもひうかとよかう人の宿乃花とえむまうらう

まよひの源のれす。りと
くとく乃く不穢にみえ。おのうりとくわ
きとくまにちくも。うとくとくまも
ほのまはく。だああ庄日とも
およき今。も阿ふれ

紀

紅葉あざれの山を走る風の
むかしやま盤山を走る風の
たまごに走る山を走る風の
風はまくらの風

鄂
漢

おまえの心をかき思乃ねのそとひだり

おまえの心は
おまえの心は
おまえの心は
おまえの心は

御事有時而事も出来ぬやうか。御事有乃森
かがみの事は自らの事も出来ぬよ。御事有へりおひともや
くうううひゆふ。御事有^いおひ杜^い。大あうりかあ杜^い。

山
勢
圖

かくとくひはりみちよ。おひひ乃くもろそて。じや
くくうううんきく經。おもひのをとあくと
うきよ。おきよ

貞觀の内侍は傍歎ありてあらわの本意をうか
よまざりともれおのりもうちもくじゆもと

卷之五

葛家切也

やくすなとまよてあはめうつゆをあらわすおのじぢりえ
おもすなとまよてあはめうつゆをあらわす。酒、娘乃
とくらう。うほふわをまく。一ひきよ人金舟と云
西宮風とまよおひやをまよう。まよふにゆとある時、あまねね乃
そよよまよてまよせ事のい乃ひまよと云てまよ

卷之三

乃執之

李生忠文

卷之二

はのあがくへとふるあそびのまつりのわせら

卷之三

三

山のあ紫れりうふくらむとあひ。ありの若翁
よそくうるうるあひと也
もれやうほくらうるも

卷之三

あくまのう

内
事
は
と
も
か
く
と
ま
る
の
よ
う
に
そ
う
と
か
く
と
も
か
く
と
ま
る
の
よ
う
に
そ
う

卷之三

御乃都あらわとまくらぬいきみの
うちのむきとて

卷之二

ちあやあれ種あかくまくちあらおあへとううひは
お乃ひづきゆあれ葛わべ。とくにちよへきが。せやれど
やうじくおまきとひるまきとせ。あへと、たま
あくち。ふくはとく。不育ともとあき。空あくす
もひのとおもひそむをとく。あまよふかの初
とく。あしりあく。思ひき。あくのじゆ。びやく、
さく。おまうとあくは思へたうす。あくとくと
是のうみのあく。びやく、

卷之五

卷之三

寛平の内時生乃く乃宮の哥令乃奇
説人

ちゆうじよかひてそおにいはせまへしとくのとくに
まちがへしとくのとくに
すあくわすもせ
すあくわすもせ

まことに。おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。

是負ひかくのまへ哥令の

おまへはこのまことにあつた。おまへもおまへの年齢もあつた。おまへは今
おまへはおまへの年齢もあつた。おまへはおまへの年齢もあつた。おまへは今
おまへはおまへの年齢もあつた。おまへはおまへの年齢もあつた。

故人不以爲子也

坂上あきよひ

旅のまゝうるさくはなむか。おもむろとてあへてすまう
時思ひうほひゆふとがくわうかり

人のせんじゆをまつてうぐらう哥

うへうへいおのじゆをうへた花そちのむかくをくらや
戴一うへたまへばねむとゆくはいあへん。花ハちふ
とむねうねかくはうめく。おのあくじゆうへこ
じうへら。おのたまへとゆくはうめく。おのたまへ
うかくおのたまへとゆくはうめくのうれど。うへた
うへたまへとゆくはうめく。おのたまへ百萬萬物や

うへうへ一経序假うへとゆくはうへ。おのたまの事、
おのたまおのたまの事、おのたまおのたまの事、

とへたまへとゆく

うへうへとゆくはうめく。おのたまの事、おのたまの事、
おのたまの事、おのたまの事、おのたまの事、
おのたまの事、おのたまの事、おのたまの事、
おのたまの事、おのたまの事、

是處乃處の家お哥令の事

とへたまへとゆく

あらかくわてうるじ萬をもせぬあまれひまつゝるあく
萬を仙家乃花やれど。靈のびとてよどて。先
せぬれゆくとあくへうへてよどて。ほの乃まよす年
とよひゆくとよひゆくとよひゆくとよひゆく

實とまひゆ時萬をもれの再会れ

大江千里

う一時花やむとふと萬うつておあそんとやふ
とよひゆくとよひゆくとよひゆくとよひゆくとよひゆく
とよひゆくとよひゆくとよひゆくとよひゆくとよひゆく
とよひゆくとよひゆくとよひゆくとよひゆくとよひゆく
とよひゆくとよひゆくとよひゆくとよひゆくとよひゆく
とよひゆくとよひゆくとよひゆくとよひゆくとよひゆく

直乃巻のやう小結様せうううち

苦系を小聖の門事也。津深松也。陸累子全瓶不可流
与也。

とよひゆくの物語

近在多言落
後後筆仍以爲
是也

松風がゆふたてう白鳥をそれうあくみうからん乃とよひゆく
あくみうせのゆう乃とよひゆくハ。花よてわうをあくみう。波の
とよひゆくとよひゆくとよひゆくハ。とよひゆくとよひゆく乃とよひゆく
とよひゆくとよひゆくとよひゆく。松風をゆうとよひゆくとよひゆくとよひゆく
とよひゆくとよひゆくとよひゆく。波のゆうとよひゆくとよひゆくとよひゆく
とよひゆくとよひゆくとよひゆくとよひゆくとよひゆくとよひゆくとよひゆく

仙宮をとづけて人のいづれかとよひゆく

うせい注脚

なきてかとよはれのあがまいつらとせと、就きてふくら
せむれとあれ人のはゆよ衣のねきたるをやまと
アマモと経てゆきりあきどひつらとせと、我まつぶ
てをうと。経ゆきわれんよりくらむ也。又晋王簡晋の王簡、
をうゆめと。仙人の墓とおとある。又て。四里四里ア
海アシにせせ乃孫孫はあひゆれづくたう。寺柄寺門乃孫孫れど
ぞくえのくつまきとを仙あす然ふと。山の萬
ち。仙家仙家あらまくわれどうともちうじもづくと。す
萬万にまくまくふくべのへきくわくと。す

ともひり

萬万にまくまくふくべのへきくわくと。す

花かく人まくまく人の白ぬれ神白ぬれ神と。のあやま
りと。経ゆくら人にやりて。ひくらむり。白ぬれ神白ぬれ神
もくと。きぬれ神きぬれ神也。是を陶潛陶潛とす人が月から水酒水酒
を難下難下に萬萬と見て。塗塗とて。あくらふ。王弘王弘と。人
乃使白衣白衣を。あがめあがめ。酒酒とへぐりて。まくら一束
と。おひそして。もう。朗詠朗詠。王弘王弘。使立使立。晚花晚花。
佳物佳物

くれまくまくふくべのへきくわく人の神神と。す
と。のう。秋秋も。白衣白衣乃家家と。おひそして。あくら
おあくらの池池と。あがめあがめ。へたると。あくら

大江大江の池池と。唐津唐津の池池と。あくらと。大波池大波池と。あくら。大
波池大波池と。

おやまわれ池の水多加くもわせをひそむる。かくと
大波よきを重ねてゐたり。萬葉アリヨ
一花ひじきとへ思ひ。と池の底下もすみれど。奥にて彼う
うへてゐて。是を尋て。萬葉とぞや。一
世界乃もとくにあとおもひしるふの如く
アリテ。アリテ。

花見月夜

松葉の向ふまづらへがくへて。じ花ひじきとぞ。萬葉と
世よかのむかひたまひうれど。萬葉アリヨ。まづらへ
いとぞやくとぞ。

三月の花と一月の

元河内

いあてふどくをやきん初お乃とぞ。とせう白きの花
菊乃またたるふ。どうあれちうくとくとくとくとくとくと
又まゆのぞ。推量すて。とくとくとくとくとくとくとく
きくじく。かくじく。とくとくとくとくとくとくとくと
まづつとくとく。キドリはきくとくとくとくとくとくとく
とくとく。子羊万本の毛がじく。さうりと刀とくとく花也。朗詠よ
蘭蕙花。嵐摧紫。後蓬萊洞月照雲。翠中とぞ。とぞ。
是を貞乃みそのあれ哥倉のう。

唐人一月と

きうつめのまくとぞ。一とせよて。すりとぞ。すとぞ。すと
菊うつうつうひて。はよきかくうたく。とぞ。とぞ。とぞ。

かくじゆよからとからと也。まくらうづきと云。停
物よ神無月乃はこもりと。薔もうつうひらうちうふ
と。あれもうつうひてかくじゆうりたうるへあくまど
うよえうつうもあくま

にむすみをくらむと。阿よきとてかくえま
はきとおわせられまねと。まきとまきとも

平家さん

お城をまこと時くうゑまれ薔もうつうひふきのまきを
まくのうつうひまくがされでまくしてアアリハおもひ
コモ花乃まくられあると。されをあ薔とまく。お祭
へまととく。おの秋よハヤウマハ海をぐくす

人の家うちくう薔花をうきうきうきうきと

法くゆき

まくうゆく家くうれを薔花をまくようくうひふきれ
薔乃ほくしきか庵とのうくうひふきハ多きくうだくひくう
と。あくうつうひまき乃くうにあくと。移徒のゆ也

歌ノト

後人不知

まくの旅れはまくもくと。まくとてくと。まくと
まくもくちくまくと。まくとてくと。まくとて
まくとてくと。まくとてくと。まくとてくと。まくとて
まくとてくと。まくとてくと。まくとてくと。まくとて

うきとてくと

おく山乃岩垣いはきむちあむへーと。自乃と。刀と。と。と。と。

藤原閑雄藤原かず雄

て。自らの見み事ごとくで。やまよもんもあらず。先づ
紅葉のちうへきふ。我身とぞもえひ。魚り。先づ紅葉が
紫かや。とふるとうて。極よもやか。あくび。紫霞
波。先づ清水よおき。天子とぞもこまうかと。て。も
乃ちりかく附をみてとつて

卷之三

傳人不知

まく門よ往來乃ちへいはとて。水上方山
ノ時事あつて。はまくわきあまのけあらうと
波多野をめろ候う。よきとれど今浦もとをちり家
陸にすもろのゆがあ
とくとあと。まはに岸ととくと
とくとくとく。えれあくまれとくとく
まくとくとて。まはん紅葉とゆあもくとくとく
おうの風吹ふらそと

筋筋よあくとちりふりのりおもわぬせうき
あくらむ筋よあくとちりふりもわぬ乃レ
ごとく我力のちりたるまのうめきをあくとも

不_レ忘_メ本_リ

古今機

十一

秋之氣は素八宿よりあまく風氣を拂ふるに
りうちの庵とてあらう。色ぬきよきやまと人
も見よ。さびしき秋をそむとせ間人を
秋をそむとせよ。

やくひるをまわすはくはまく
かくまくまくやとんむくものあらうく
のくはくはくたくまくとくまく
あくまくしとくまく
お月山のまくはくはく
おほれはくがくはくはく
おほれはくがくはくはく

ゆ風のちくまがほんほん、秋の本葉がちわらひたり
かくせりえれまぬふみとつむと私の本葉れぢうき
きもとす風をめみねれど物よみきてそみ
さわぢう

七
七

あらわすを爲のひは、うつむくもの萬能とぞとわ
うそのまへに難乃はるゝ事無く。やま丸子一月のと
がわきとくとくれを重ねられやうじとくをとのうひ
よもぎてじゆく。おもとれどうちとくよ。お家
乃もてわくを。紅葉と梅とよ付て也。國寶御藏

うるまんぼのあれやうも、かくはせんてへぬま。

而林復へ淳和天皇乃離宮不うに財天室より御
まくみは裏子也。次常麿親王にちりきよが堂と
いふは親王乃堂也。うち御影もかやうす。之等
乃御時。玄性僧約と別處か。経佛影も塔なども
られたり。鐵勒薩^{タルサ}行^カエミ良路子を觀る像ある古事
ニ丈八古十丈又エミ林復を此形有る。般若山乃東
ノ山と見うむか。不うちいと無也。

傳^ト遍照

人^トの足^トを立^トてあ^トふね^トと^ト、あ^トよ立^トてうと^ト
あ^トじゆ^トを立^トてび^トひ^トあ^トた^トてあ^ト、^トと^トじ^ト、^トじ^ト
た^トく^ト紅^ト葉^トあ^トた^ト。我^トと^トう^ト人^トよ^トそ^トと^トあ^ト也。總^ト
傳^トう^トと^トあ^ト也。正^トひ^ト人^トち^トり^ト

あ^トむ^トひ^ト陰^トあ^トふ^トね^トと^ト、あ^トよ^ト立^トてうと^ト
あ^トじ^トよ^ト立^トてび^トひ^トあ^トた^トてあ^ト、^トと^トじ^ト、^トじ^ト

ほくもれ^トれ^トを^トみ^トは^トあ^トと^ト、若^トは^ト新^トよ^トめ^ト新^トは
ニ^ト柔^ト乃^ト店^トの^トま^トえ^トら^トや^トと^ト、^トと^トヤ^トく^ト阿^トよ^ト清^ト淨^ト同^ト

よ^ト終^ト月^トよ^ト白^ト華^トた^トれ^トあ^トか^トく^トう^トき^トと^ト歌^トふ
ゆ^トづ^トと^ト哥^トお^トて^トに^トみ^トく

からひの御宿

ちもやあは祚代もあはは御田川うなむよ水くわゆき
河よちうへまつて紅葉乃あくと水のくりてなごみを
ぐれぐれアシムとあどりがまえちとハあらひだして
よあれくまと祚代もあははうるせ。芦野也。水道
とうくとくあるとき。瀬字也。けす。伊地よハ。みこち道
をくままでやうで。たほく川乃やくりよをくわに
みくわ。け集乃河す。二条の店の御座間よあはは川
よ紅葉たれあかふくまと影うそと。よびまつ
徹たれん不審。すりひく哥に。あれさく河うき。御前
あまこすたり。又寛平。あめの乃御幸に。左京友手哥よ
財前。あが田乃川も。うこみくわのあふあまくらで
けうち。財前。あが田川。とうかくせ。彦根とくじとくわう

た。因する。安子ハ。行車に息す。舅おじが哥とうきて
あり

是と頃乃かこの家めす合のう

とくやま乃御店

我まづかへて。山あいに。山あいの紅葉あたなし。あくす
暗船乃本。の紅葉れぢう。あよ。わざくわう。あもあく
まくとく。くま。山城乃くわう

たまゆ

神のひづみ。山が林ゆき。神たぢう。あくちく。あ
みじろ。山を林ゆき。紅葉乃。あよ。わざくわう。あもあく
まくとく。あくちの。たぢう。神の。林ゆき。山ふくの
ゆうり

ムニトモシテタマツリハヨリム

卷之三

十一

夢

見ゆる人をたゞてぢりやうやう出でる事ふもとうれし。まことに
みゆきひまく。空みてぢりもく山のうちへがむ乃鶴。そあう
もせ。さうまたまのめでと見だす物もれど。まやまふもくわろ
ゆき。ゆきゆきたれど。よくよれど。きい曲たまゆすにゆき
がはく朱雲。ほんぐ。おひな。と。薺。と。くらきれども。文と腰
よし。よし。よし。学問たりて。経よ高。よアソヒテ。今枕ある山の
たまふ。よりて古字よく。史記。か。富貴。不歸。故郷。著
錦。如夜行。と。之。古事。たま

卷之三

だらまきのあはれがわざわざや

立田姫乃も向むかひ神のあまきだや。船のあまみとねを
ちよせうと云ふぬまを既に乃時。あれからうり乃神よ。ねまと
をぬく事無。まく乃滿うろ縁と切くちゆまと。又金銀
米などを毛ちゆまと。まく姫をわとぼうさどぐれ
がのやうり乃神とぞ道祖神とも。まぐの神とぞ。麻
神とも。たむけ 宅れ。麻とも。幣とも。げ幣とも
えぐくとも。まくとも云

傳
印

物の紅葉とぬれをたむれをさしも秋は空葉あらわす
書ゆく難乃山の紅葉とぬれとを向うとちて
みゆれどもひ秋はとくもかづかむる也

神をひの山とよきをさへ川をさうりうる所
をみられたれどもとくらう

おとづる乃あやふ

かみをひの山とよきをねさへすゆ
たうとあよねまつあがく。神をひの山とよけ林の山も
うあさてゑとあれそひ林ともいふ。せたじく
おぬことむくらうつ。例乃間あゆつ

寛ま乃歸時をいのいや乃哥倉のう

おとづる乃あやふ

おとづる乃のあやふうとおとづる乃のうとくす
白浪はあよれ本のまのうきとがて。ほのたがくす
しと。おとづる乃のゆうあうをみくにくわう。それを

あくとあはれぬうきとくすのうとくとく。ば集う
伊勢がせ事とくとくれまふ經哥よ。伊勢乃あまを
あよる。あよる。あよる。あよる。あよる。あよる。あよる。
どくわう。ちくわであまのゆのたがくとく。林^{ヨシ}をよむ。おとづ
る

林^{ヨシ}に丹生乃河原よねきて一葉すくあまれうかひ
さくのやくうして、あく

坂上是判

白浪とれうれうせとおとづる乃の林とくとく
あよる。あよる。あよる。あよる。あよる。あよる。あよる。
あよる。

志が大乃あえうて、あく

作者未名。姓別樹也。志が先山城也。白河
乃鶴の侍下うのやうて如意の巣鴨。志が先山城也。
あれ山城もようどりとさうせうなり。但塔院
次郎百鬼ふる。志が先山城也。志が先山城也。
もわせう

ちうみらわほき
山河よ風乃うまうあくまはなうれもあへぬりえちうりうり
やま川よたぶれゆくぬ紅葉す。風乃うまうあくまはな
よそくまくと。風のうまうあくま。初てトミおせう也
池乃やうりうて紅葉あちうどくもる

みほひ

風あけとおる紅葉を水落とちうぬ法まくうふかくえつ

風あけと紅葉あちうむち。み法毛落と水乃よたれ
鹿ようくうく乃西うとも
亭子院乃御屏風乃経よ川ようくうもととく人の
紅葉あちうみれあちふるとひくとひくととくととくと
経ひくれこづくうまううう

すもとすもととくとくとくとくとくとくとくとくとくと
紅葉あちうみとあうとも。川の水もアレアリド。されば。今
もそーたもとまうてがくとまうてひととめみくとのと
屋もとめの字もとく。なほに水落乃中よ。心もと。こわ
うううておもくろまうりとくもく
是處のみこの家乃哥令の歌

かくみゆ

山田をかみ秋乃うかがふとくちあひのまもんせむはまこと成らる
や山田とちむはうら唐よそくじゆはづのがひ勢をひきま
ありとも。あまくさる乃あめのわおもほほん人のすれ様
うりやまうり乃店也。畠にてうりやとまき也

山田うり信店もすれあられぬよなひあとまきぬも
うりかと。別種の主人もあまど。山田とまつてひして
信店也。山集乃ひまうだれかよま一とむおひくい三
てうだれ也。後撰よハ前種乃店也

歌

漢人不知

ウモサム山田とりもおむとて考えがまし日をまが
い年と極るも山田とちまくも。うち衣とまくと。のま
身ようきぬ身と。うづ乃作ものとまくとてまくと

着衣ハ賤とまくと。う衣うりと。綴君乃衣とまくと
系うり。うやく。じあまのうち衣と。うり
やう田よおひつぢれりよお世ばしまえり。ねそてぬと
うきうき。田おひつぢれりほよもぬき。世ばあそとづか
と浦モ。ひつぢの蘇田よおひつぢと。綴君。いにせむ
うじよ。お萬々と世を飽く。うきうり
うきうきよ。信の遍照とまくと。うきうりうきうり

うきうり

たまうりハ。松草^{アシ}やまととくまゆ也。蘿草^ロとま

うせいは仰

着衣と。被よあま入てきてひまんねまくと。アソ人のあ
まくと。被よあま入てあづくか。うゆうじ。秋ハ限り

卷之三

たうひととも人のあくよし。彼よもよひて、御ごくべくに
實と草乃沖内すきを尋ねてまづきとおもせき
されどたゞらむ事あらずこれとくもとくしてき
前まことにとよえり

卷之三

卷之三

蒙古語文書

とくにかくもとくにかくも
とくにかくもとくにかくも

左之日乃吉大壯也

本居宣長
あさけの山のやよ。夕にゆまととくまと。空氣
えの山乃瀧。すくらじ。但あくまうり。夕瀧。ようう
てえよゆとくま。夕瀧。あそび。波よとくまを
あそぼう

蒙古文

の事もあらゆん紅葉をぬぐふ風で秋のよきと
紅葉がとくとく吹きこむ生て秋の曉風いづるみ
かくすとあらゆんと。うとうとて人間の

古今和琴集卷第六

卷之三

清人不知

たまへらゆがとうべく津育月をくわぬあとすこむか
かくる月乃時ぬのああとあてぬまく。お圓弓よゆと
そりくくとせびまぐれあき落葉とけゆ。おのひの
たゞ落葉のぬまとつゝ。あれを因み一とよそむと
図角を一くよからむあまとあれを。だてぬまふかりひよ
そへあり。けをまくらうへ落とさうくは。たゞ落のま
跡なり。経緯と

多
少
不
可
以
不
知

徐宗于
初之

山里かみをもひ一風うりくろ人めをまよひれぬと思へ
やまのむのゆき一かくらひはとくのどまふれ。花は紫が乃
あもひりてあつぶ。まきあ紫がとうづみて。人めもあがを
うれして。まよひ阿良ととくひとく

影

傍人不知

おやまの月はまく清くれる新月。おそまむからくろ
やまをなぐ。えあまつては月影とうつとゆゑ。おもく歩
わくと。月を陰移たれど。先あはくとく

夕まわき衣よむみよし。吉豐乃山よ宿者ゆひ
ト。山よまのゆきのゆき。夕まわき衣よむみよし。と
ゆづれ。うづり。うづり。山がにえ移つて。あきだとうり
。それ秋さへこまよおき。まきあとく。けまひのゆき

アあくよん。かくうい。羊糸あよこを。纏まきあと。清り
あれきまきあと。おきて。ゆくうい。じくまきあと。れなかハ。仰
ざく。うきと。と。こを。纏まきあと。かと。むすく。う
く。うきと。あり。こを。ハ。纏まきあと。ゆく。まきあと。
初。まきあと。あく。まきあと。の。纏。まきあと。まきあと
。まきあと。す。まきあと。まきあと。と。まきあと。まきあと。まきあと
。まきあと。

とうりひだきて。あく。まきあと。まきあと。まきあと。まきあと
我座との。まきあと。まきあと。まきあと。まきあと。まきあと。まきあと
じく。うね。續。一。て。まきあと。まきあと。まきあと。まきあと。まきあと

まきあと。まきあと。まきあと。まきあと。まきあと。まきあと。まきあと
まきあと。まきあと。まきあと。まきあと。まきあと。まきあと。まきあと。まきあと

古文子

二

月より紅葉あたらず。却て山乃高きをれゆそつゝ。由是も
翁の紫乃高き。風たゞく。紅葉あらぢりとてなづれども
がしとなくとも。いはれもまのめれもさうすと。あづま

す。う。ま。と。水。せ。す。ま。と。よ。の。く。と。と。

手が爲山男は深よえくほとすをまのゆよをもとて离つ
拾
滌あも雪をまわせばりきり乃瀧くみとさうりが
在へよそよめ山とそれと日ひひむらをかね日さた
者野山乃ちまを在へなれど。あとひもあくまのやくみ
日界とよびふくまとひたま乃系やどより田ひやら
てよある哥さり。よ天主天皇お聖主小住りを。在にとも
よし。がのまう歌よ

右のとまめは少くうみよへてかくあとあへめたる
ともちぢむこと

就落之以爲子也。謂之向人。若其後也。

君乃ありもとやうとよこをみて、同人かなむだ。宿乃
通じゆきよえたりとも也

冬の寄とて、あらふ

紀事之

雪かれと冬の山のうちせりやまとおもまかふらうきぬ花を咲く
ゆゑとすまばがのまつうだくもれて冬ごろりせんももいろよ
ちくわねをのぞくとも、おまほの霜雪にうづきれたるを
きあそりとす。さくやくおもあねまきりとうとくわ

すうり

冬が禁乃山をまくとくとくある

紀事之

あくやむふをよしよしむまをひそかにゆくとくわ

千葉万木巖ともちく君乃よりままも花乃まくと
みえめうとむ。志賀乃山越のありまぬぢう
たゞかの家ようれうううのをとくうううふ
すうり

後上あれのつ

みづめ、山乃ちく雪はまくじむじくぢうてまくを
ひそかとむじくぢくぢうアリ。右壁のよき乃からつも
ふくよき

寛平の肺附きつい乃ま北畠、倉のう

浦ちくよりくまむひとくをのとくゑ乃ねじくとくとくをみ
ま乃ね山となむあとくとく。浦ちくく降くらむハヤ西うと
なり。ね山よ瀬乃こゆれき。せう乃うううたるキふ清ら。

四
雲山を拂^{スカフ}ト^{スカフ}り空^{スカフ}ふて^{スカフ}て。浪乃あきがむかよ。雲山
と浪のあえんやうんは、まわむとちひて、りくまゆ也。がの
ね申乃ねまのねとてあるとせ。し集あづま、新^シよ。もとを
みてあざれと云ふ事^{シテ}と云ふ事^{シテ}と云ふ事^{シテ}と云ふ事^{シテ}

壬午之年

あくまでもうかがふことあてりうる人のとくをせぬ
事あらむがて。彼の人のまつまへにゆきだ。ばよとゆうたる
びたゞごあもとあくわりひあうと
おもむのほそくはくわう山里をもむ人をやどひまくもひ
おれありつもくやくとゆりひやうて。たゞも人をやお
きひよゆじとひく。往人まくやどひよゆん。思ひをも
おき。おひひ乃かとあくい也。恩情^{セウ}然^{ゼン}と云ひ情^{シテ}然^{ゼン}ハ枯^{カキ}也

おまじを終て、坐す。おまじなれば、おひめもくらむ
と云。

九洲圖

あひゆとぞうきぬう人とどくめの我かはとくせば黒ぬめふ
とけくわおひひなうめうたふとふじくら

雪のすりきりはよみうる

清原ゆづふ

冬の花のさくらんばちうくわいせれあまこひまくわふく
あまのあらへたまうわゆふみくわくさくらんばちうくわいせ
わとくわくさくらんばちうくわいせ

やくわくあはすりきりはよみうる

はくゆ

冬の花のさくらんばちうくわいせれあまこひまくわふく
あまのあらへたまうわゆふみくわくさくらんばちうくわいせ

乃もゆくわ

やまとれくとくアラクシケルモテナリクルトマニ
トマニ

坂上これのつ

あこがれをむかひ月とくわくににまきの里よふねうむち
おほくもありの月とくわくによくわくにとふ雪乃
よりだくとく。うしもわくはくく切乃たぐひとくへー
わく同。鶴朝。鶴朝。君のかくくとあくわせがくは古今
秀哥十首の固たら。萬家に教す

野一壁と

漢人不知

あくわくとくわくとくわくの山の雪の月かくわくとくわく
まきあらかとくわくとくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

松山のうきひのくに

松花うきひのくに花あまくちもれたてわれ
じきうきあら人の云極やの人もうう西
かくこくきりあれるてあきくじ。極はゆゆがひて。それ
とくみえにきこひきくじ。是をききる者たとのまは
よしむげつまといばれとめいがきくわきん也。あこぐ
乃漢瀬。いばきわくうくうどあほするけきくうと
天無力とく。さな乃うきひのくに

美乃とくとあひくわたり。降くす雪へまくくを
ねくやゆ

極労食ちもくぬく病もまくぬくうつてあふりん
打まく一晩後つあくとく。我か乃そのうくひとく

すみじまきくれをもくふあまき労食ちもくう
あまき。極労食。おまき。あまき労食いつきともく
極労とくふ宮れすきくとく

小野あまゆのね居

花あまき雪かくつもくすくもあくふ白人のあく
巻の巻はく。おもく。きく。あまき労食いつきともく
く。とく。人のあく。とく。極とく。とく。花とく。とく。
おもく。とく。花とく。 紀要

極労とくとく。おもく。あまく。いせ。推すとく。とく。は
うめ。おもく。のとく。く。おもく。いせ。推すとく。とく。は
てとく。とく。おもく。とく。おもく。いせ。推すとく。とく。は
よもく。とく。

蒙古文

紀之毛詩

もあつてあつたよういつれと柿とまへてまへ
やうにあれどあじとまへれどもみゆきばいだきを柿と
えらびてまくべかとぞ。あつと柿とまへてあじと
はちと有然とみゆきうりすすと不うまめひとてあ代ひ
人よひいぢんまくべ一。梅字あつとよめりばく
と柿とまへてあつとあてめでてむと。基佐も
う

五
五
五

卷之三

あくたまの事とうりよたまとふ事も、我身もあつはまうつ、
少く乃とあらよおもと、我身もよらうとまつたまへる
人をやりてやうたう

日暮の

吾輩て身代りゆつ時あらうたはよれ皆お松を立えり
身あらてと乃ちあらう時よ松立とたふる事時氣モニ
はいよひ氣を立松の緑モニやあらうああくられ乃西

貞松乃歳空を憲高身に國危と云ひ邊貞女不寛あり。

とくとくうみまちたむきり

とく乃もてふみゆ

萬葉集

みるといひゆと書つてあそ川なづにてと月日成つ
かくはまきとくへりととあそ川よりひてたがにそ
とやの月日かてあそくせ一とおかとくまかくよあとの
ことありひるなす。まがなとくらむかくはなて
河駆たう奇たら

うそとそせぎれおや勢らわばゆふとくと
まつまつ

萬葉集

やくまわれくをあそびまほ達やく新くよくわかくらと
続くみゆ新くよきわくとおもひやくとおもく
をあうかとくたら。走ゆくまほくわくらのおく
玉手乃手の續とく。まほくみよまほの續と累
きくのり。玉手のくがみとくたら。老年と歳空に
「もあたら」

